

原子爆弾救護報告について

一、長崎医大医療救護隊

外米本館三階の皮膚科診察室で北村包彦教授が患者を診察しはじめた時であった。内光、爆風、爆音が同時に吾々を襲った。教授の後ろに立つていた私は、教授と共に部屋の隅々をたまたまつけられた。しばらくして立ち上つてみると北村教授の目の上と大きな裂傷があり血が迸っている。私も頭部教台所からの出血で顔面に血が流れ、目が閉じにくく状態だ。北村教授が私に西森君、早く救護隊を集めなさいと云われた。北村教授も私もささどけが爆弾の直撃を受けたと思つた。周囲の状況はまごご然山かつていなかつた。

この救護隊なるものは、米空軍の本土爆撃が熾烈になり、大学では非常事態に備えて、臨床教授と隊長と、医師、看護婦、学生を編成された十一の救護隊を組織し、出勤の体制をとつていた。

中国本土への爆撃は大村海軍基地から飛び立つていたため、米空軍の大村基地への爆撃が多くなり、そのために大学の救護隊が大村に出勤し活動していた。

爆撃により大学が壊滅し、教授、医師、看護婦、学生の殆んどが死し、あるいは傷ついたため、救護隊は全く機能が果せなかつた。こうしてなかで、かろうじて生き残った隊員により、被爆者の医療救護がなされたものがある。

その一つは、自らも被爆しながら、滑石に仮救護所を設営した調教授を隊長とする五六救護隊であった。ここでは生き残った医師、学生達も加わり、一六名の隊員で八月十二日から、約一週間、一〇〇名程の被爆者の救護が行われ、この救護所で角尾学長も死された。滑石救護所については、故調先生の手記と詳述されているのでお読み願いたい。

二、被爆後、二十五年目に見付かつた十一救護隊報告書

3.

長崎放送は原爆問題を熱心に取り扱っている
民放で、昭和四十五年、同局の「被爆二十五
年・長崎」というテーマで色々の取材を続け
ていた同局の田川裕記者が、被爆前後の警防
活動について、城山地区の警防団長だった田
川福松さんを訪ねたとき、こんげんものがあ
りまなかと云って見せられたのがこの報告書
であつた。福松さんも被爆者で、子供達も元
十一区療隊で手当を受けている。

原爆資料の収集を意欲的に行っていた私のと
ころへ、長崎放送の記者がこの報告書をもつ
て訪ねた。私も初めて見る報告書である。

前述のように調教授の元六区療隊のほか、永
井隆先生が被爆者の救護をされたことは聞い
ていた。如己堂で静養されている永井先生を
私は屢々訪ね、雑談したが、一度も報告書に
ついて觸れられ、ことになつたので驚きで
あつた。

八月十二日から二ヶ月間、三山^{みつま}で診療した百
二十五名の詳細な記録とともに、放射線専門

4、
家である永井先生が、原爆放射線による患者
の特徴や原爆の将来に及ぼす脅威などについ
て草紙した思考が記されており、学長におす
る報告書である。

（三十五年も）

何故これが学長の手に渡らず、民家に保管
されていたか明らかでない。

しかしこれは九十一年救護隊の隊長、永井隆が
学長宛作製した公文書である。

朝日新聞社が長崎放送の同意を得て復刻版の
発行を計画したので、私は教授会に諮り、賛
同を得て、原文の字真版と活字が一冊の本と
なり、世に出るようになった。

報告書の原本は医学部原爆被災学術資料セン
ターに大切に保管されている。

永井隆先生が救護所として三山を選んだ理
由については、朝日新聞社編「原爆被災学術資料セン
ター」報告書「救護報告を続ける」という小文を私が
載せているので参考にされたい。

相川先生.

大学の救護隊のこと、エノノ救護隊の
報告書の見付かたのきさつについて、
簡単に記しました。

急ぎ書きしましたので十分な文章になつ
ていません。適宜に訂正下さい。

三山の位置を示す略図同封します。父要
あれば入れて下さい。

急ぎ要件のみ。

西森一正

